

住吉の職人—宮大工を中心に—

住吉大社 権禰宜 小出 英詞

○番匠（ばんしょう）とは

木造建築に関わる建築工匠で、今日の大工の前身にあたる呼称。古代律令制において建築官司である木工寮・修理職・造寺司などに属して宮廷營繕に従事した工匠で、番上工・上番匠丁などの呼称に由来するという。番匠は大工・引頭・長・連の階層を形成し、中世以降は大工職によって番匠を統括するようになった。近世には大工の呼称が建築工匠の一般名詞となった。

○住吉の番匠について

『延喜式』には伊勢・鹿島・香取と共に住吉大社は式年遷宮の制度が定められ、二十年に一度ごとに社殿が建て替えられた。その木造建築に関わる建築工匠として住吉番匠が置かれ中世まで大規模な造営が実施されてきた。戦国期には滞り、やがて武家政権による官匠の優位や、神領焼失による造営の遅延によって住吉番匠も次第に衰えていった。維新後も辛うじてその名を遺し、住吉の造営にも携わっており、番匠ほか職人の名前は戦前まで確認することができる。また、伝統的職能を他に転用して名を馳せたものも少なくない。

関連史料

①永正14年（1517）造営時にみえる番匠 ※出典：『津守則氏御殿修理日記』

総大工源四郎、権大工助二郎、修理大工幸福祝、そのほか番匠二十余人
檜皮師 西京五郎衛門

②慶長11年（1606）造営時にみえる番匠 ※出典：『津守家盛記』

豊臣家大工棟梁 泉州堺亀屋与左衛門・与右衛門
当社大工 総大工宗衛門・権大工与兵衛

③承応4年（1655）造営時にみえる番匠 ※出典：『住吉松葉大記』造営部

棟梁大工 官匠中井主水代匠茂右衛門尉
大阪番匠 **新左衛門**・五郎兵衛
当社番匠 総大工・権大工・弟子二人

④宝永5年（1708）造営時にみえる番匠 ※出典：宝永遷宮棟札

御大工 山村与助橋徳純
下棟梁 中村弥七郎・駒田清兵衛
四郎左衛門・勘兵衛・吉左衛門・吉右衛門

⑤明治3年(1870)神祇官に提出名簿より ※出典:『摂津国住吉一社中交名書』

番匠	松井要蔵藤原近舎	平芳次兵衛藤原近治
	仁井田次郎兵衛藤原近定	久保田良蔵藤原近光
鍛冶職	吉川仁兵衛	
屋根職	大和己之助	

⑥明治34~40年(1901-07)四本宮修復棟札より

第一本宮

大工…松井駒吉
 手伝…土本市松
 瓦師…丹司庄右衛門

第三・第四本宮

家根檜皮葺・丹塗・胡粉塗…川崎宗吉
 仮家根・足場・掃除・片付…土本市松
 拝殿渡殿家根地直シ・荒忌垣修繕…松井駒吉
 拝殿壁塗…武田藤吉

⑦昭和10年(1935)御大典記念館(神符調製所)棟札より

請負人…松井駒吉
 大工棟梁…田中鷹夫
 左官棟梁…陸野勝美
 屋根職…安田徳松
 土工手伝頭…土本光太郎

⑧昭和11年(1936)絵馬殿修理棟札より

請負人…松井駒吉・松井正太郎
 大工棟梁…山際孝二・粕谷秀尾
 大工副棟梁…松浦茂樹
 屋根職…岡本惣吉
 鳶職頭…土本芳松
 左官棟梁…陸野勝美

『住吉名勝図会』

正月十一日「手鉦始(てをのはじめ) 辰の尅一の神殿の前」

『住吉秘記』年中行事式

正月十一日「巳刻 御社頭大工鉦初ノ儀式アリ」

宮大工メモ [例]

④	③	②	①
武田家	小山家	川崎家	松井家
藤吉—三次	卯之助—丑松—徳松	仙之助—宗吉—佐太郎	要蔵—駒吉—正太郎
…	…	…	…
最後の宮大工(左官・門塀)	通称「位牌松」・公益社創業	地車匠「川崎屋・住吉大佐」	最後の番匠家「鉦始の儀」

住吉と地車（だんじり）

○『住吉名勝図会』寛政6年（1794）

水無月の御祓は住吉年中の大祭礼にして、摂泉河内はいふもさらなり、紀の国、淡路、播磨、その外遠き国々より参詣の群船、大坂・堺の津々にみちくして神幸を拝し奉る、摂府の守よりも代参を立て神馬を引せらるゝ、その余国々の侯伯おもひくに奉幣あり、とりわけ大坂・堺の町々よりは地車・祇園囃・かさりてうちん・旗のほり、にきにぎを尽す

○『露の朝顔（蘆の葉風）』文政3～12年（1820—29）

晦日住吉名越の御祭

住よしの御神は月毎に御祭にきはしく、年に七十五日度御祭有とかや、されとも水無月つこもりを大まつりと唱へ其賑はひ大方ならず、はた所々の御神もいとにきはしく、町々を引もてあるく車楽(*)のはやしたつる音は、日々天地にとゝろきかしましきまで目覚しくなむことに、天み津御神ハ難波橋より安治河まで舟にてわたらせ給ふ、御送りふね迎ひ舟簀ふねなどこそりて、さらに水の色もわかぬまで其賑はしさをあけてかそへ尽すへからず、東とかはり美々しからねと賑はしきは亦こと処に有ともおほえず ※車楽=だんじり

○与謝野晶子「住吉祭」

『精神修養』明治44年8月号

海辺の方ではもうだんじり地車の太鼓が鳴つて居る。〔中略〕近く迄来た地車のきしむ音がした。

牡丹に唐獅子竹に虎 虎追ふて走しるは和藤内（わとうない）。

こんな歌も聞えて来た、さうすると三つの井戸の金滑車（かなくるまき）がけたたましい音を立てて、地車の若衆に接待する砂糖水を造るので家の中が忙しくなる。〔中略〕通る地車の数が多くなつて、砂糖水はもう間に合はないで、奉書包みを扇に載せてその世話人達に番頭は配つて、橋の上に立つて大きい目をした張飛だの、加藤清正だの地車の彫物を和歌山の客は珍しさうに見た。〔中略〕

猿田彦が通り、美しく化粧したお稚児が通り、馬に乗つた禰宜（ねぎ）が通り、神馬（しんめ）が通り、宮司の馬車が通り、勅使が通り、行列は終（しまひ）になつたが、神輿はまだ大和橋を渡つたとか渡らぬとか群衆が云て居る。黒い波のやうになつて道を通る人は皆南の方を向いて神輿のお旅所の方へ行くのである。浜の方からは神輿の迎へに開運丸、住吉丸などと船の名を書いた旗を持つた若者が幾人も幾人も走しつて行く、四五町先へ神輿が来た頃から危ながつて道端に居る人が皆店の上へ上つて来る。幾千の弓張提灯の上を神輿が自然（ひとり）で動くやうに見えて四方に懸けた神鏡がきら／＼として通つた後二三分で祭の街は死んだやうに静かになつて、海の風が藻の香を送る。

※与謝野晶子…明治11年生、昭和17年歿（1878～1942）。生家は堺甲斐町の菓子屋「駿河屋」。

晶子は、住吉の御旅所・宿院頓宮境内にあった宿院小学校に学んでいる。

○与謝野晶子「私の生ひ立ち」

四 夏祭

(「新少女」大正4年)

お正月の済んでしまつた頃から、私等は今もうお祓が幾月と幾日すれば来ると云ふことを、数へるのを忘れませんでした。〔中略〕
大祓祭(おほはらひまつり)は撰津の住吉神社の神事の一つであることは、云ふまでもありませんが、その神輿の渡御が堺のお旅所へ〔中略〕祭提灯で街々が明るくなつて居ます。私の町内の提灯は、皆冑(かぶと)の絵がかいてあるのです。隣町は大と云ふ字、そのまた隣町は鳥居と玉垣の絵だつたと覚えて居ます。私は正月の来る前の大三十日(おほみそか)の日よりも、この宵宮の晩の方が、どれ程嬉しかつたか知りません。〔中略〕そのうち空の雷鳴が遠くから次第に近い所へ寄つて来るやうに響いて、**地車**の音がして来ます。大海浜、宿院浜、熊野浜などと組々の名の書いた団扇を持つて、後鉢巻をした地車曳きの子供等が、幾十人となく裸足で道を通ります。風呂に入りますと、浴槽の湯が温泉でも下に湧き出して居るやうに、地車の響で波立ちます。〔中略〕
全堺の町が湧き立つやうな騒ぎになるのは、この時から後(のち)なのです。いよいよ大鳥さんの渡御が済んで、人々は真実(ほんたう)のお祓の宵宮の心もちにこの時からなるからです。誰も眠る者などはないと云ふのはこの晩のことでした。

○食満南北「お祓ひ祭—盛んであつた喧嘩—」

(『高島屋百華新聞』昭和4年7月1日号)

私は堺の『お祓ひ』の昼、即七月三十一日に柳の町の大道で生れた。
さうして私の家の前で『**ダンチリ**』が私の家の屋根へ上つて瓦をなげ飛ばしてゐる中へヒョッコリ出来たのだ。堺ではこの『**お祓ひ**』—住吉祭礼—to **地車**の喧嘩をする事が吉例—吉例といふのも変だが—になつてゐる。甲斐の町の**舟地車**が勝通したのと、それは／＼血なまぐさい祭礼であつた。
イザ喧嘩となると、すぐ**地車**の屋根から人家の屋根に飛移つては瓦をなげる、め組の喧嘩を地で行くやうなものだ。
何だか私は子供心に頗る堺らしい覇気があつてこの**地車**の喧嘩が好きだつた。
私はこんな日に生れた加減か何処かに野蛮な喧嘩ずきな点がある。堺の祭礼の洗礼を享けたからであらう。
大分に喧嘩したくなつて来てゐる、暑くなつた『セイ』でもあらうか。

※食満南北…(けまなんぼく)。明治13年生、昭和32年歿(1880~1957)。

明治から昭和にかけての劇作家、歌舞伎作家、俳人。関西劇壇の重鎮。

昭和5年、天神祭の鉾流神事の再興を提言したことで知られる。

堺地車騒動

○『堺市史』第三卷

此大祓祭には堺から数十の地車が出て一つの名物となっていたが、明治二十九年に衝突騒ぎがあつて以来廃止された。

○「住吉祭とだんじり —消えた堺・住吉のだんじり—」講義レジュメより

明治 29 年 8 月 1 日、住吉大社の『御祓い祭(住吉祭)』に合わせ曳行していた湊組(現出島)の『船地車』と北の包丁鍛冶組(鍛冶屋町)の地車が、中之町大道(現 堺市堺区中之町東 1 丁あたり)で、双方地車のすれ違いが原因となり、道幅が狭い道路で対立。

双方は容易に譲らず、道筋両側の屋根の上からは屋根瓦を投げ、下では大乱闘の大喧嘩に発展。ついには、鍛冶屋町の一人が明治 10 年 2 月 13 日の明治天皇行幸の際に行幸所となった当時の鈴鹿邸にあった大身の真槍で 2 名を殺傷するという事態になり、堺警察の警察官数十名が出動して収めたものの、負傷者は数知れず、道路は瓦や礫の山となって收拾がつかない状態であった。この騒動を『堺地車騒動』と云い、江戸時代より継承されてきた堺旧市域での地車曳行一切禁止となる。そのため、地車は他所に売り払われ、地車彫刻で名を馳せた『堺彫又』一門は、その後堺を離れることにもなった。

明治 39 年、日露戦争奉祝により布団太鼓の許可があり、それ以降、堺旧市域の町は次々と布団太鼓へと変わっていき、地車は合併後の新市域で見られるだけになってしまった。

○大阪朝日新聞「大鳥祭と住吉祭」明治 40 年 8 月 2 日記事

堺市各町の地車と鳳村其の他付近の地車及び太鼓は、例年互ひに路をセリ合ひ勢ひを競ひ喧嘩口論に及ぶを常としたるが、数年前其の筋より禁止せられ、神輿の如きも多人数にて昇くを禁じ、大八車に乗せ牛二頭に輓せる事となりし為、今年も平穩無事に渡御を卒へたり。

関係年表

明治 29 年 (1896) 8 月 1 日 “堺地車騒動”

湊組船地車と庖丁組地車が中之町の大道で衝突、大乱闘殺傷事件に及ぶ。

⇒当時、旧堺市および泉北郡域より地車 20 数台が曳行され、御旅所の宿院頓宮に練り込んでいた。10 年前にも大喧嘩があつたという。

大阪毎日「往古より此地車を出せば必ず生血を見ねば神慮に背くなどと云ふ習慣なり」と言われるほど喧嘩ばかりの地車曳行であつたという。

明治 39 年 (1906) 日露戦争の奉祝のため、禁止されていた練物曳行の許可。

明治 40 年 (1907) 住吉祭の神輿昇き復活。※それまで大八車に乗せて牛に牽かせていた。

堺では、北開仲・北浜・並松町、西湊などが「ふとん太鼓」を新調。

それ以降、後に開口・菅原・方違・船待・月洲・田守の各神社氏子がふとん太鼓を順に新調してゆく。昭和 20 年堺空襲によってのふとん太鼓の大半が焼失するまで 35 台を数えるまでになった。 ※例外に「鯨地車」ほか

地車匠 住吉大佐

○若松均『摂河泉だんじり談義 地車工匠編』 昭和 58 年

<大佐>

現在の摂河泉において、曳行されている地車（岸和田型〔下地車〕以外）の中では、〈大佐〉の手にかかる作品がもっとも多く、「上地車の大佐か、大佐の上地車か！」と、評された名匠で、泉州岸和田の地車工匠が、一目も二目もおく由緒ある名門大工である。

〈大佐〉とは、大工の佐兵衛に由来する名称で、安土桃山時代末期から昭和三十年代初期までの永きにわたり、摂河泉に君臨した堂宮大工であり、地車工匠でもある。

○だんじり大辞典・地車型分け図鑑 「だんじり」eo Special Edition

擬宝珠勾欄住吉型

明治 20 年ころから大正期にかけて、住吉（現在の大阪市住吉区あたり）に在住していた大工《住吉大佐》・《西だんじりや》下川安次郎などの手により製作された地車。

または、これに準ずる形態の地車を指す。

屋根の勾配は比較的緩やか。6本の角の通し柱で屋根を支え、大屋根を支える四本柱には「唐獅子」などの彫刻が施されている。見送りは「三枚板」で細工。そのほとんどに武者物の彫刻が施されている。台木の前後は「波頭」で細工されているのが一般的。台木の上、左右の土呂幕の前には「擬宝珠勾欄」の下勾欄が付く。後轆を取り付けるための「轆差し」・「旗台」が付き、梶を取るため「後梶子」を用いる。

《住吉大佐》・《西だんじりや》作の地車には、この住吉型の屋形細工はそのままに、大屋根と小屋根の段差が小さく「轆差し」・「旗台」・「後梶子」の付かない【大阪型】仕様が存在。そのため、大屋根後部に「懸魚」の付くものが一般的であるが、付かないものも存在する。また、数台ではあるが、三枚板の付かないものも存在している。

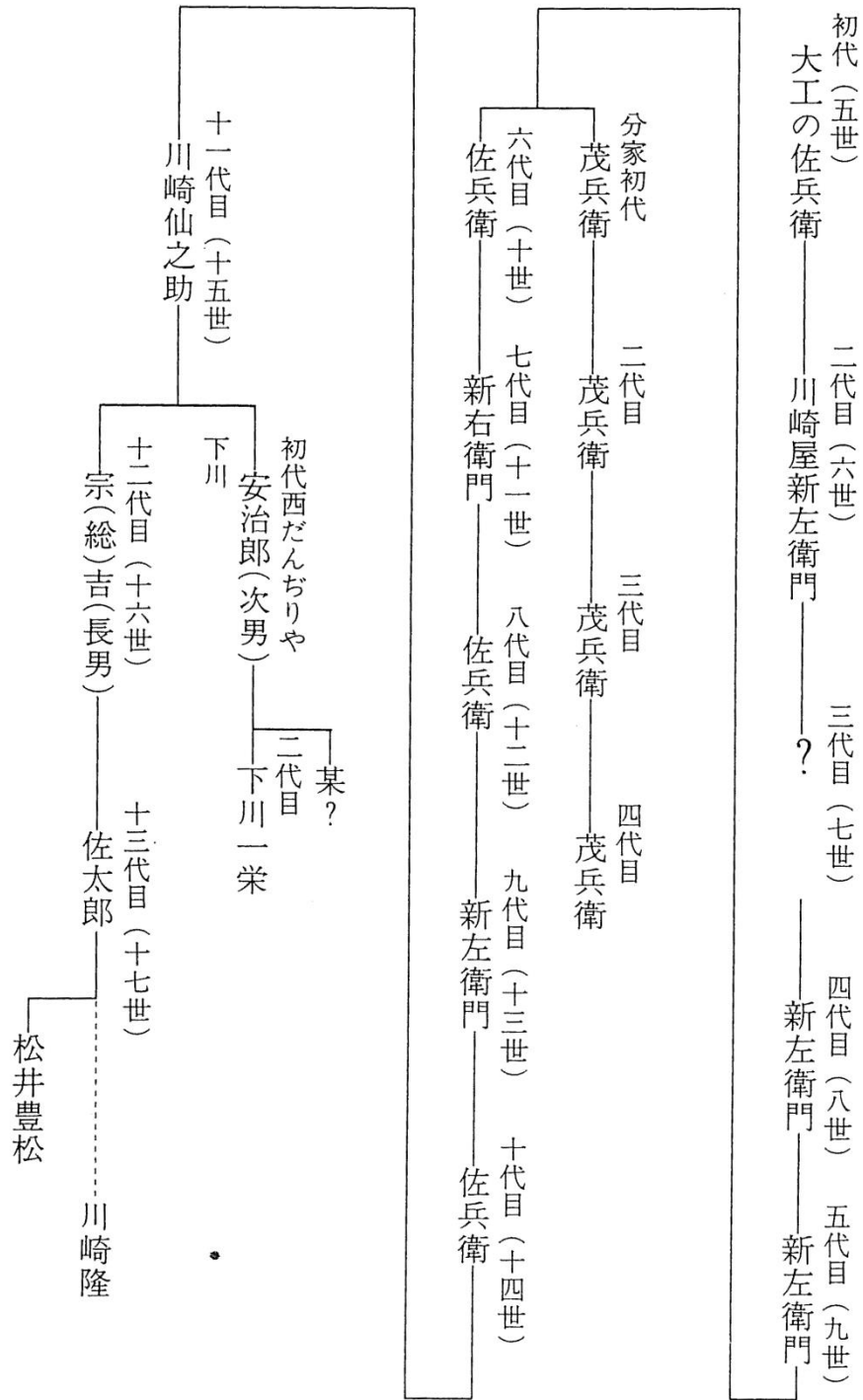
このタイプの地車は、均整の取れた独自の形を持ち、人気を博し、『大佐ブランド』・『大佐型』と言っても過言ではない。彫物は《小松》一門の彫物師たちの手により細工されたものがほとんどである。

なお、地車研究の貴重な資料である『大佐地車請取帳』には一年に三台もの地車を売却した記録が残り、見送り三枚板の寸法もほぼ同じであることから、言わば「仕入れだんじり」として、【堺・住吉型】仕様と【大阪型】仕様の両タイプを注文により造り分け、販売していた可能性も高い。

住吉の大工佐兵衛

ほかに大佐分家の「大茂」もある（絶家）。また、「大源」も存在するが不詳。

〈大佐〉 家系図



若松均『摂河泉だんぢり談義 地車工匠編』より

住吉の彫刻

ア. 住吉大佐（川崎大佐）…地車彫刻

【現存する大佐地車】 具体例：大阪歴史博物館（元安立七丁目）の舟地車

大阪市生野区片江 大阪市平野区泥堂町 大阪市平野区流 大阪市東成区大今里 大阪市西淀川区姫島（元遠里小野）
大阪市鶴見区鶴見東 堺市津久野中（元安立町九丁目？） 堺市陶器地区うぐいす谷（元粉浜？） 堺市石橋
東大阪市吉田川島（元遠里小野） 東大阪市森河内新地 東大阪市川田 東大阪市長田中 東大阪市長田西
東大阪市中小阪 東大阪市若江東 東大阪市横枕 枚方市宇山林 枚方市北向山東町 羽曳野市西之口
羽曳野市鍛冶町 門真市打越（元安立町五丁目） 八尾市郡川 河内長野市高向中 河内長野市高向上
河内長野市高向下 河内長野市喜多町 河内長野市長野 河内長野市松ヶ丘 富田林市新堂 泉大津市西之町
泉大津市宮本町 泉大津市上市町 豊中市上之町 伊丹市荒牧 宝塚市安倉 神戸市東灘区岡本 神戸市東灘区東之町
神戸市東灘区田邊 神戸市東灘区西御影 橿原市十市町北ノ辻垣内 大和高田市奥田 大和高田市本町巻
※北海道江差姥大神宮の山車「松寶丸」には神主津守國禮の歌と共に茂兵衛・佐兵衛の名前が見える（弘化2年）

【参考図書】徳永道彦『住吉大佐一彫 地車彫刻の美』（友月書房、平成7年）ほか

【住吉大社境内】神宮遷拝所（明治11年、寺田伊兵衛の奉納）銘「大工佐兵衛」

イ. 住吉主水（田中主水）…彫刻師

住吉主水こと田中主水。仏工・彫師。定朝上人三十三世孫と称した（定朝は平安後期の伝説的仏工）。当初は四天王寺仏師として明治期に活躍し、大正頃からは住吉大社の近所に居をかまえた。住吉大社お抱えの彫師として、神輿や山車から屋台まで多く作品を残し、特に住吉大社の土産物や、宮中への献上品なども製作している。明治・大正・昭和の住吉大社式年遷宮において、反橋の古材を用いて記念木彫を多く手掛けた。彫物の銘には、「住吉主水」のほか、その居住地から「住吉大社畦」と刻したものもある。

彫刻以外に、絵画にも堪能で俳画なども多く手掛けている。また、郷土史研究誌『上方』第122号（昭和16年）には「住吉と彫刻其他」を寄稿している。

没後は住吉大社末社の招魂社に合祀された（昭和25年頃）。なお、弟子には利山藻晃などがいる。子息が主水を継いで三十四世を称した。

ウ. 住吉の欄間彫刻

大阪欄間は近江八景などの立体的な彫り出しで知られるが、住吉大社の社頭の景観（反橋・松原・四本殿・高燈籠など）を浮き彫りにした欄間も盛んに製作された。詩歌文学の神で上方文化の象徴として客間に相応しい題材であり、現在も住吉をはじめ大阪近在の旧家、全国各地の旧家にも数々見られる。

【参考例】 五條藤岡家住宅 ※国登録文化財……奈良県五條市近内町526

高城庵（知覧武家屋敷内） ……鹿児島県南九州市知覧町郡6329

旧奥村家住宅（藍住町歴史館） ……徳島県板野郡藍住町徳命字前須西

旧室崎家住宅（高岡土蔵造りのまち資料館） ……富山県高岡市小馬出町26

住吉の土人形

ア. 住吉の「埴使（はにつかい）」

毎年の祈年祭（3月）・新嘗祭（11月）に先立ち、大和国の畝傍山に使者を派遣し、祭器に用いる神聖な「**埴土**（はにつち）」を採取する。古代より伝わる神事。

※『日本書紀』（神武・崇神紀）、『住吉大社神代記』に記事がある。

イ. 「土」に関わる住吉の産業

①住吉大社の「坏師（つきし）」の伝統

祭祀に用いる土器「**平瓮**（ひらか）」

②屋根瓦製造「住瓦庄」＝住吉の瓦屋（丹司）庄右衛門

[明治以前] 住瓦庄（丹司庄右衛門）※屋根瓦

[大正時代] 丹司窯業所※煉瓦・土管・建築陶器

[昭和戦後] 丹司製陶㈱ → **アサヒ衛陶株式会社** ※衛生陶器ほか

③土管製造「森延」＝森下延三郎

[初代] 森下延三郎尾張国常滑村出身※素焼壺

[三代目] 明治初年より土管製造玉出樋管に着手して名声

[四代目] 森下延一の **森延土管工場** ※防火用水瓶、土管雨樋ほか

ウ. 土人形の製作と販売

①住吉人形本家「京安」

明和年間（1764－71）京都深草で北尾**安**兵衛が土人形の製法を習得、住吉で土人形を作り始めた。昭和初の北尾**良**（神職北尾貞治の妻）まで製作された。

●小冊子『すみよし人形』 ※「**住吉埴司**」「住吉神社神事用土器製造人」

②住吉土偶師「亀治」

住吉土偶師「亀治」第17世の**亀井雅吉** かめいまさよし（1885～1955）

代々「住吉土偶師」を称す。初代**亀井治**兵衛

明治32年頃まで家業で製作。戦時中疎開先の桜井神社宮司の勧めで製作再開。

○伝説

徳川の末期、飢饉と悪病それに日蝕までダブった時、亀井家の祖先が感得した奇瑞から、牛、倉、俵の土細工をそれ／＼サン付けして、厄除、魔除のお守りに知人へ頒つて来たと言う話。（島田福雄「住吉おもちゃ尽し」）

①末廣堂所蔵「**千疋猿**」作者 ※末廣堂ほか現存

②晩年の昭和30年には「**みこし千疋猿**」 ※住吉文華館所蔵

③土人形「**喜々猿**」ほか住吉土人形を数多く復刻した。

③招き猫の製作

住吉近在の製作者が多数いた。北尾良の他にも、松谷鶴松・松谷亀松など

住吉の絵師・画工

ア. 絵所（えどころ）

画所あるいは絵所。令外官。宮廷にて絵画に関することを管掌した。
長官職の画所別当が置かれ、画所預、墨書、内豎などの官職が任命された。
大同3年（808）内匠寮に併合され廃止。

イ. 絵所預（えどころあずかり）

元は画所の次官級官職。朝廷や幕府に所属する絵師の長で、**住吉大社**や春日大社をはじめ有力な社寺にも置かれた。宮廷では古く**巨勢派**が知られ、室町時代より**土佐派**が禁裏絵所預を務め朝廷や幕府によって重んじられた。

ウ. 住吉絵所（すみよしえどころ）

古く住吉大社に置かれた絵所。鎌倉時代の**住吉慶恩（慶忍）**を祖とする。その後住吉絵所が絶えていたが、寛文2年（1662）後西天皇はそれを憂えて勅命を下し、土佐派の**法橋如慶（住吉如慶）**に住吉姓を与えて住吉絵所を再興させた。住吉如慶の後、嫡男の住吉具慶より代々幕府御用絵師として出仕し、幕末まで**狩野派・土佐派**と共に画派の権威を誇った。

●寛文3年（1663）5月 「住吉大神社絵所証文」（「住吉家伝来記録類」東京芸術大所蔵）

「 住吉大神社有絵所有以乎中世、
住吉法眼以丹青鳴于世数代相統其家絶矣、
粵法橋如慶出自土佐流欲繼住吉法眼名跡望、
住吉社絵所懇情甚深依之咸其志、
授住吉称号宜其子々孫々永不失家業為、
神致丹青之術者証文如件
寛文三年五月國治（花押）
法橋如慶老 内記殿 」

【釈】 「 住吉大神の御社には中世より絵所があった、住吉法眼は絵画を代々世襲していたが、いつしか絶家してしまった。法橋如慶は土佐派より出て、往古の住吉法眼の名跡を継ぐことを望んだが、住吉社は絵所を望むところの篤い志を感じ入って、「住吉」の称号を授け、子々孫々に至るまでよろしく家業として伝えてゆき、神の域まで絵画の技術を高めなさい。証文はこの通りである。 / 寛文3年（1663）5月 住吉神主津守國治 / 法橋如慶老 内記殿 」

エ. 住吉大社絵所預（すみよしえどころあずかり）

住吉絵所は古く住吉大社の扉絵に染筆したというが、絶明治以後これが絶えた。
明治29年1月12日、改めて宮司津守國美より**福井月齋（藤原金穂）**に絵所預を委嘱、絵所預を再興した。昭和11年には**高橋竹年**が美術顧問に委嘱、四本宮金扉を染筆。
戦後の昭和29年には**安江不空**を住吉大社絵所預に委嘱。昭和36年式年遷宮において**菅 楠彦・生田花朝・中村貞以**が委嘱され、四本宮の金扉絵画が染筆された。その後、**長谷川青澄、松岡政信、長谷川笑子、水江東穹**が委嘱され今日に至っている。